

カッコウ

カッコウの声が聞こえてきました。当別は青山奥のオイスカ事業地 2014年5月25日9時半頃と記録しておきます。カッコウは「札幌市の鳥」です。昭和32年に初めて札幌に来た頃はこの時期、北大構内でも普通に声が聞こえていました。今では郊外に行かねばお耳にかかることが出来なくなりました。カッコウとその仲間たちは託卵というけしからん習性で知られていますので、



好きになれない鳥ですが、スウェーデン人が作曲した「カッコウワルツ」の曲は世界的に多くの人に親しまれています。恵迪寮の寮歌の幾つかにも詠みこまれていて、札幌の鳥に祭り上げられているのも頷けます。分布は広くユーラシア全域からアフリカの北部にまたがります。日本には夏鳥として渡ってきます。

この声が聞こえないことは、とりもなおさず託卵相手の小鳥たちがいなくなったことを意味します。悲しいことです。カッコウが卵を託す鳥の巣の形はお椀形でなければなりません。カッコウから見て宿主として狙われる鳥は日本では20種類にも及ぶようですが、ホオジロ、モズ、オオヨシキリ、コヨシキリ、アオジなどお椀形の巣をつくる小鳥であればなんでも来いのようです。カッコウに狙われた鳥は自分の遺伝子を育てられないので、カッコウ自身が宿主を減らす行為をしているので、小鳥が少なくなるのは当然の帰結です。カッコウ科に属する鳥が世界に38属138種類もいるというのですが、その内託卵する不埒な輩が40~50種類もいるというのですから、神様の魂胆がわかりません。日本では他にホトギス、ジュウイチ、ツツドリが知られています。

当別川の河畔にあるオイスカ植林地の周辺はカッコウの宿主になりうる鳥たちが好む環境なのでこの環境を維持する意義は大きいのです。



この日当別ダムの上水吐から水がオーバーフローしていました。ダム湖が満水であることがわかりました。このダムの湛水によって湖底に沈んだ自然はほぼ永久に復元できません。小鳥やカッコウにとって大きな痛手なのです。一方で水中生物にとっては棲息域が拡大することで新しい水中生態系が出来ることでしょう。